

## 「樹木だより」を振り返る

寺澤和彦

### 「樹木だより」とは

「樹木だより」は、光珠内季報（以下、季報）の7号（1971年1月）から129号（2003年2月）までの間、32年にわたって計60回がシリーズとして連載されました。いずれの回も、表題の左に「樹木だより」の文字が四角い枠の中に印刷されており、季報の中の他の記事と区別されています。一回に原則としてひとつの樹種が取り上げられ、花や果実、冬芽、葉、枝などの形態やフェノロジー（季節の進行にともなう変化）などが紹介されます。「樹木だより」の連載記事としての共通項は、各回のテーマとなるもの、たとえば花や果実などの図が挿絵のように添えられていることです。それらの図は、執筆者自身が描いたスケッチがほとんどですが、中には版画や写真の回もあります。ちなみに、現在の季報の表紙には、樹木の花や芽生えの絵が背景として描かれていますが、これらの絵はいずれもかつての「樹木だより」に掲載されていたものです。季報200号発刊の節目にあたって、「樹木だより」シリーズ連載の経緯について、当時の林業試験場、とくに森林や樹木の生態研究に基礎をおく造林・育林分野の研究状況や現場の雰囲気も少し織り込みながら、辿ってみたいと思います。

### 連載シリーズの概要

「樹木だより」シリーズ全60回の表題、テーマ、執筆者などを表-1に整理しました。

初回から37回（1984年7月）までの14年間は、毎年途切れることなく年に2~4回のペースで掲載が続きました。季報そのものが年4回発行ですから、高い頻度（多い年では毎号）で掲載を続けていくには、執筆者も編集サイドも相当の努力を要したことは想像に難くありません。1985年以降の6年間のブランクを経て、1991年11月から掲載が再開され、1999年までの毎年1~4回と、2003年に1回掲載されました。

取り上げられた樹種は、一般になじみの深い落葉広葉樹の高木種が多いのですが、ナニワズやフッキソウなど林床に生育する常緑性の低木や、ツルウメモドキやマタタビなどのつる性木本が取り上げられることもあり、連載に変化を添えています。道内の自生種がほとんどですが、ときには書き手が身近な場所では出会った道外産の樹種が選ばれることもありました。

執筆者は合計で16人になります。その他に、スケッチに付されたサインから、図だけ提供した人が2~3人いたことが察せられます。いずれにしても、執筆者はすべて当時の林業試験場の若手から中堅の研究員です。その中でも、斎藤新一郎さんと菊沢喜八郎さんがそれぞれ計22回と計14回（連名での5回分を含めると計19回）で、この二人の執筆回数が飛び抜けて多くなっています。

執筆者の構成やページ数をみると、37回までと38回以降とで、かなり傾向が違っていることがわかります（表-1）。そこで、連載時期を前期（1~37回）と後期（38~60回）に分けて、経緯や主な執筆者の横顔を見ていきたいと思います。

### シリーズ前期：1971~1984年

初回は「おにぐるみの冬芽」で、執筆者は斎藤新一郎さん、添えられた図は版画です（図-1）。当時、斎藤さんは、海岸林や河畔林、防風林、防雪林などの造成や保全のため



図-1 おにぐるみの冬芽（斎藤 1971）

の研究を行う防災林科の研究職員でした。樹木全般にわたって形態や生態、分類などに関する知識と調査経験が豊富で、スケッチや版画など美術的なスキルとセンスも合わせ持っておられました。前の年度に創刊された季報は6号まで発行されていましたが、斎藤さんによれば、「季報の記事が硬いものばかりだったので、絵入りの短文を載せることにした」のだそうです。シリーズの名前となった「樹木だより」も、もともとは斎藤さんのオリジナルな表題の一部であったとご本人は回顧されています。その後16回目「ハルニレの花」までは、もっぱら斎藤さんによる執筆です。春は開葉や開花、秋は果実、冬は冬芽、というように掲載号の発行される季節にふさわしいテーマが選ばれています。図を入れても1ページ以内に収まっていることから、コラム的な存在として季報の中に定着し、親しみやすい普及誌のイメージづくりに貢献しました(図-2)。ちなみに、斎藤さんはこの時期、「落葉広葉樹図譜—冬の樹木学—」(四手井・斎藤 1978)を出版し、その中でも樹木に関する知識とスケッチ技術をいかんなく発揮されています。

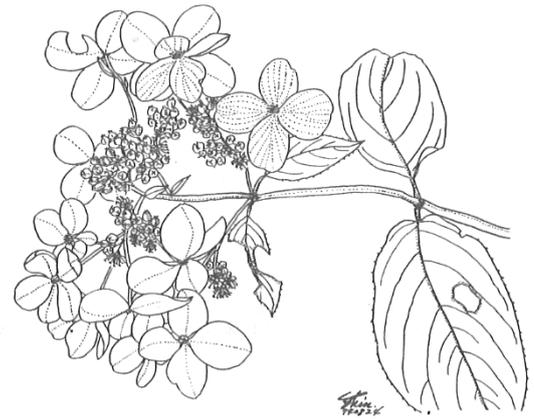


図-2 アジサイノリウツギの花序 (斎藤 1975)

二人目の書き手として17回目「サワフタギ」に登場するのが、当時、造林科の研究職員だった菊沢喜八郎さんです。北海道の天然林、とくに広葉樹二次林の保育方法を主な研究テーマとしていた菊沢さんは、道内各地の広葉樹二次林に樹木の成長量などを調べる固定試験地を設定して毎木調査を続け、その成果は広葉樹林の密度管理や収穫予測のための「収量—密度図」として実を結びました(菊沢 1983)。この収穫予測の理論はカラマツやトドマツなど針葉樹人工林にも適用され、いまでは現場で広く活用されているシステム収穫表の開発につながっています。菊沢さんは、そのような広葉樹林の成長やサイズ動態に関する研究の一方で、ご本人の述懐によれば、「季節の移りかわり、それに伴って演じられる木々の変幻自在なふしぎな魅力と美しさにひかれ」(菊沢 1986)、林業試験場や自宅の周りの広葉樹林をフィールドとして、葉や花、果実など樹木の枝先で起こる日々刻々の変化の観察と記録を続けていました。「画を描くのは子供の頃から好きだった」という菊沢さんは、「よく観察するためにはスケッチをするのがよいと考えて、植物スケッチを始めた」そうです(菊沢 2005)。「樹木だより」は、そのワクワクするような観察の結果の一端を紹介する機会でもあったのかもしれません(図-3)。

### シリーズ後期：1991～2003年

1990年まで6年間の中断の後、1991年から「樹木だより」シリーズの連載が再開されました。中断以前は1ページ以内のコラム的な記事でしたが、再開後は3～4ページに大幅に拡大されました。シリーズを特徴づける植物スケッチに加えて、本文に関連したグラフや表が添えられるようになり、研究成果の解説版としての意味合いが強くなっています。

この時期の造林・育林分野の研究を振り返ってみると、カラマツなど針葉樹人工林の新たな施業方法の開発のための

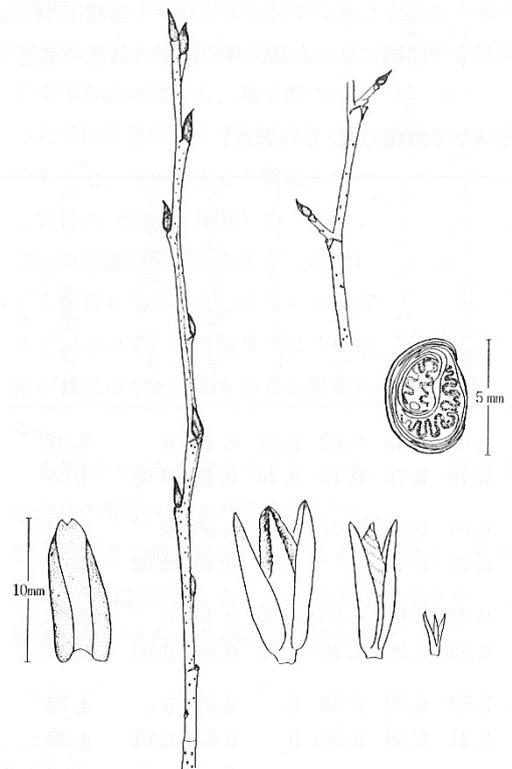


図-3 ミヤマハンノキ 一枝と冬芽— (菊沢 1980)

研究が進められていました。光珠内実験林では、1980年代後半に、疎植(500本/ha)による無間伐施業の可能性を探るカラマツ新施業試験地や、グイマツ雑種 $F_1$ やアカエゾマツの植栽密度試験地が次々と造成されました。これらの試験地は、現在すでに造成後30年以上を経過し、人工林の施業コスト低減のためのひとつの選択肢として植栽密度を少なくする施業(低密度植栽)が指向される中で、植栽密度と造林木の成長や幹の形質の関係に関する実証データを得ることのできる貴重な場となっています。

さて、話を「樹木だより」に戻しますと、育林科(旧・造林科)では、上で述べた針葉樹人工林に関する研究に加えて、従来から進められてきた広葉樹林の生態や施業に関する研究が連綿と続けられていました。1990年前後のこの時期には、とくに広葉樹の更新に関わる種固有の生態を明らかにするために、開花から種子・果実の成熟までのプロセスや、種子の発芽から芽生えの成長の過程などに関する研究が多様な樹種を対象として行われていました。菊沢さんをリーダーとして、浅井達弘さん、水井憲雄さん、福地稔さん、清和研二さんたちが、それぞれ異なる樹種を分担しながら、花や果実のフェノロジー調査、人工受粉試験、播種実験などを精力的に行っていました。つぎつぎに明らかになってくる樹木の開花や発芽の巧みな仕組みを、朝ゼミという勤務時間前の勉強会で聞きながら、私たち他の科の若い研究員もワクワクしたり驚いたり、大いに刺激を受けたものでした。これらの研究で見いだされたさまざまな広葉樹の興味深い生態が、学会や論文での発表と平行して普及誌の季報に「樹木だより」としてどんどん送り出されてきたのです(図-4, 5)。研究メンバーのひとりの清和さんは、1994年4月に東北大学に転出した後も、東北の山で広葉樹の発芽生態に関する研究を学生たちとともに続け、なぜ天然林では多様な樹種が共存できるのか?という当たり前のことのようにだけでも謎に満ちた問いに対する答えを探り出そうとしています(清和2013)。最近清和さんが出版した2冊の著書(清和2015, 2019)では、さまざまな広葉樹の個性的な生活史が、花、果実、種子、芽生え、成木などのスケッチとともに親しみやすい文章で紹介されており、まさに「樹木だより」の拡大版といった趣を感じさせます。

さて時は進み、斎藤さんが1995年4月に専修大学北海道短期大学へ、菊沢さんが同年5月に京都大学生態学研究センターへそれぞれ転出した後、「樹木だより」は執筆者が数人交代しながら10回続きました。育林科の小山浩正さんは、この時期の傑出した書き手のひとりといえるでしょう。小山さんは、前述のグイマツ雑種 $F_1$ 植栽密度試験地の調査をおこなって初期の結果のとりまとめなどをしていたのですが、その一方で、学生時代から関心を持ち続けてきた広葉樹の種子生態の研究も行い、それが「樹木だより」のテーマにもなりました。小山さんの担当した回の魅力は、なんとといっても書き出しから読み手の興味を引きつけて離さない軽妙かつ知的でハイセンスな文章でしょう。たとえば、56回目「ナナカマド」の書き出しは、「あっ!お兄ちゃんが僕の羊糞取った!」ですし、58回目「サワグルミ」は「ガリレオ・ガリレイは16世紀のイタリアが産んだ天才物理学者。彼は『ピサの斜塔』で好奇に満ちた民衆を前にあの有名な実験を行った。」で始まります。こうなるともう研究成果の解説の域をはるかに超え



図-4 キハダ(水井・菊沢 1994)



図-5 イタヤカエデ(清和 1993)

て、一般市民向けの科学エッセーといってもよいかもしれません。小山さんの伸び伸びとした筆致は、彼が2005年に山形大学へ転出した後もますます冴えわたり、地元の日刊紙「庄内日報」に大学の同僚教員とともに「森の時間—山形大学農学部からみなさんへ—」というシリーズで10年間120回にわたってエッセーを連載することになります。2冊の単行本（鶴岡市森林文化都市研究会2012, 小山・平2016）として再編集・出版されたこれらのエッセーには、森で起きていることや森歩きの楽しさを伝え、里山と市民との距離を近づけたい、という小山さんの熱い思いが詰まっているように思われます。「樹木だより」は、小山さんにとってその思いを実践する最初の試みの場であったのかもしれませんが。

### おわりに

「樹木だより」シリーズは、森に生きる木々の姿や営みに心惹かれた若き研究者たちが、その面白さや魅力を多くの人々に伝えたいと願って書き連ねてきた画文集といえるでしょう。20年近く前に連載が終わっていますので、今の季報の読者の方々は、ほとんど「樹木だより」をご覧になったことがないかもしれません。季報のバックナンバーは、林業試験場のホームページで全号を閲覧、ダウンロードできますので、関心のある方は下記のサイトでご覧いただければと思います。

(<http://www.hro.or.jp/list/forest/research/fri/kanko/kiho/kihor03.htm>)。

「樹木だより」シリーズが、本稿で紹介した「樹木だより」の縁（ゆかり）の書籍ともども、日々の暮らしや業務の合間に木々の枝先や足下の芽生えに目を向けるきっかけになれば嬉しく思います。

なお、私は1980年に道庁に採用されて林業試験場に配属されましたので、それ以降のことは直接私が見聞きしてきたことですが、それ以前については、執筆した方にお話を伺ったり著書などから情報をいただきました。関係の方々にお礼申し上げます。

(道総研フェロー)

### 引用文献および参考文献

- 菊沢喜八郎（1980）樹木だより ミヤマハンノキ枝と冬芽—。光珠内季報 43:15  
 菊沢喜八郎（1983）北海道の広葉樹林。152pp. 北海道造林振興協会，札幌  
 菊沢喜八郎（1986）北の国の雑木林—ツリーウォッチング入門—。220pp. 蒼樹書房，東京  
 菊沢喜八郎（2005）ポケットにスケッチブック—生態学者の画文帳—。139pp. 文一総合出版，東京  
 小山浩正・平 智（2016）森のひみつ 木々のささやき—ふつうの人が森へ行く日—。143pp. 山形大学出版会，山形  
 水井憲雄・菊沢喜八郎（1994）樹木だより キハダ。光珠内季報 96:16-18  
 斎藤新一郎（1971）樹木だより おにぐるみの冬芽。光珠内季報 7:27  
 斎藤新一郎（1975）樹木だより アジサイノリウツギの花序。光珠内季報 26:7  
 斎藤新一郎・四手井綱英（1978）落葉広葉樹図譜—冬の樹木学—。375pp. 共立出版，東京  
 清和研二（1993）樹木だより イタヤカエデ。光珠内季報 92:18-20  
 清和研二（2013）多種共存の森—1000年続く森と林業の営み—。280pp. 築地書館，東京  
 清和研二（2015）樹は語る—芽生え・熊棚・空飛ぶ果実—。266pp. 築地書館，東京  
 清和研二（2019）樹に聴く—香る落葉・操る菌類・変幻自在な樹形—。283pp. 築地書館，東京  
 鶴岡市森林文化都市研究会（2012）森のじかん—親しみ，学び，育てる森歩き—。133pp. 山形大学出版会，山形

表-1 光珠内季報に掲載された「樹木だより」シリーズの一覧

シリーズ 回	季報 号	発行		表題	テーマ	執筆者
		年	月			
1	7	1971 (S46)	1	おにぐるみの冬芽	冬芽	斎藤新一郎
2	8		4	ほおのきの開葉	開葉	斎藤新一郎
3	9		7	みずならの根	椎樹の形態	斎藤新一郎
4	11	1972 (S47)	2	ツルウメモドキの果実	果実の形態	斎藤新一郎
5	14		10	おにぐるみの果実	果実の形態	斎藤新一郎
6	15	1973 (S48)	1	しなのきの果実	果実の形態	斎藤新一郎
7	16		4	いたやかえでの開葉	開葉	斎藤新一郎
8	10		10	きたこぶしの袋果	果実の形態	斎藤新一郎
9	20	1974 (S49)	4	はいまつの芽生え	椎樹の形態	斎藤新一郎
10	21		7	ダケカンバとシラカンバの葉	葉の形態	斎藤新一郎
11	23	1975 (S50)	1	ヤチダモの翼果	果実の形態	斎藤新一郎
12	24		4	カシワの雄花	花の形態	斎藤新一郎
13	25		7	おおかめのきの鹿角枝	枝の形態	斎藤新一郎
14	26		10	アジサイノリウツギの花序	花の形態	斎藤新一郎
15	27	1976 (S51)	1	みずならの発根	果実の生態	斎藤新一郎
16	28		4	ハルニレの花	花の形態	斎藤新一郎
17	29		7	サワフタギ	花の形態	菊沢喜八郎
18	31	1977 (S52)	1	ネコヤナギの冬芽	冬芽、冬の枝先	斎藤新一郎
19	32		6	オオカメノキの花	花の形態	菊沢喜八郎
20	35	1978 (S53)	3	ナニワズ	花の形態	菊沢喜八郎
21	38		10	クマイザサ	花の形態	前崎武人
22	39	1979 (S54)	1	ハクウンボクー冬芽と開葉ー	冬芽、開葉	菊沢喜八郎
23	42		10	おがらばなの果穂	果実の形態	斎藤新一郎
24	43	1980 (S55)	1	ミヤマハンノキー枝と冬芽ー	冬芽、芽鱗の形態	菊沢喜八郎
25	44		4	ミズナラの双子苗	椎樹の形態	斎藤新一郎
26	46		10	ホオノキー萌芽ー	萌芽更新	菊沢喜八郎
27	47	1981 (S56)	1	クマイザサの発芽	発芽	嘉戸昭夫
28	48		4	月形のクヌギ	葉、果実の形態	嘉戸昭夫
29	50		10	ヒッコリーの核果	果実の形態	斎藤新一郎
30	51	1982 (S57)	1	チョウセンゴヨウの球果	果実の形態	斎藤新一郎
31	52		6	タチヤナギ	花の形態	菊沢喜八郎
32	54		12	キハダ	果実の形態	菊沢喜八郎
33	55	1983 (S58)	2	ハイイヌガヤの種子	果実の形態	斎藤新一郎
34	56		4	シラカンバ	花の形態	佐藤孝夫
35	59	1984 (S59)	1	アサダの果穂	花の形態	梶 勝次
36	60		4	カシワの花	花の形態	清水 一
37	61		7	エゾヤマザクラ	花の形態	清和研二
38	85	1991 (H3)	11	ミズナラ	開花・結実・種子散布・発芽	菊沢喜八郎
39	86	1992 (H4)	2	ホオノキ	開花・結実	菊沢喜八郎
40	87		5	キタコブシ	開花・結実・発芽	水井憲雄・菊沢喜八郎
41	88		8	ハルニレ	開花・結実・発芽	清和研二
42	89		11	ベニイタヤ・イタヤカエデ	開花・結実	菊沢喜八郎・水井憲雄
43	91	1993 (H5)	5	エゾヤマザクラ	開花・結実・発芽	水井憲雄・菊沢喜八郎
44	92		9	イタヤカエデ	発芽	清和研二
45	93		12	マタタビ、サルナシ、ミヤママタタビ	開花、果実形態	山口陽子・菊沢喜八郎
46	94	1994 (H6)	3	ツルシキミ	開花・結実	菊沢喜八郎
47	95		4	ケヤマハンノキー葉の寿命ー	開葉フェノロジー	菊沢喜八郎
48	96		9	キハダ	開花・結実・発芽	水井憲雄・菊沢喜八郎
49	97		12	フッキソウ	開花・結実	山口陽子・菊沢喜八郎
50	98	1995 (H7)	2	ナニワズ	開花・結実	菊沢喜八郎
51	101	1996 (H8)	1	シラカンバ	発芽生態	小山浩正
52	102		3	イヌエンジュ	発芽生態	福地 稔
53	103		6	チョウセンゴミシ	開花・結実	山口陽子
54	104		9	ブナ	開花・結実	寺澤和彦
55	109	1997 (H9)	12	ハウチワカエデ	開花	浅井達弘
56	110	1998 (H10)	3	ナナカマド	種子形態	小山浩正
57	112		9	ヤチダモ	開花・結実	福地 稔
58	113		12	サワグルミ	種子散布	小山浩正
59	116	1999 (H11)	9	ハリギリ	発芽	佐藤 創
60	129	2003 (H15)	2	シナノキ	開花	渡辺一郎